母子相互作用の発達・臨床心理学的研究

分担研究者　山　下　文　雄　（久留米大学小児科）
研究協力者　小　串　　武　（福岡県精神衛生センター）
　　板　井　修　一　（　　〃　　）
　　秋　山　俊　夫　（福岡教育大学）
　　橋　爪　広　好　（北九州市，橋爪小児科）

はじめに

われわれの研究テーマは三領域にわかれる。つまり①妊娠期の母性性獲得からアタッチメント期前までの母子相互作用，②アタッチメント形成期前後の母子相互作用，③障害をもつ子どもの母子相互作用の研究である。それぞれの領域の主たる担当者は②を板井，①を小串，③を橋爪が受けもつが，しかしすべての研究者が共同で研究をおこなっている。

本年度は二年度であるので詳しいまとめが行なわれていない領域，調査がはじまったばかりの領域もあるので，ここでは一部分の報告を行なうにとどめる。

人みしり，後追いの発達と家庭環境のあり方について

研究目的

母と子の心理的な絆は，attachment ということばであらわされるが，それは人見知りや後追いの出現状態，消失の仕方を指標としてとらえられる。従来よりattachment の形成と母子間の接触のあり方との関係が強調されている。それはattachment が，子どもにとって母親を他の人物とは違う特別な意味をもった人物，いいかえればゲシュタルト心理学でいう「図」と「地」の関係で「図」として認知するようになることが基礎として必要という点からも理解できる。しかしそうであれば，子どもの認知の「地」となるべき母親以外の人物の子どもとの関わりも検討する必要があると考えられた。そこで今回は，子どもをとり囲むさまざまの人的環境，家庭のあり方を中心に調査した。

研究方法

小児科医院を受診した3か月から2才までの乳幼児82名（男児46名，女児36名）に対し，表1の「人見知り，後追い発達評価表」をもとに面接をおこない，各児の人見知り，後追いの発達段階をとらえた。

発達段階は表2に示すように，人見知りについては0～4までの5段階，後追いでは0～3までの4段階に分けた。7か月以上の子どもで人見知り，後追いのあらわれていないもの（いずれも1段階以下のもの）を不良群とし，18か月以降でもそれらが消失しないもの（人見知りでは2，3段階にとどまり4段階になっていないもの，後追いでは2段階にとどまり3段階になっていないもの）を未消失群とした。

面接時に母親から，子どもの周産期の問題の有無や出生時体重などの他，①栄養法，②新生児期の母子分離，③子どもの主たる養育者，④父親の子どもとの接触の度合，⑤家庭への人の出入りの度合について聴取した。不十分な回答しか得られなかったものを整理の際に対象から除外したため，正常群49名（男児25名，女児24名），不良群15名（男児10名，女児3名），未消失群5名（男児2名，女児3名）となった。

結　　果

1. 人見知り，後追いの出現状態

月齢別に発達段階をまとめたのが図1，図2である。人見知りについても後追いでも，7か月を過ぎる頃より2段階に入るものが多くなり，人見知り，後追いのあらわれるものが多くなっている。12か月を過ぎる頃から人見知りでは4段階，後追いでは3段階に入り，人見知りや後追いを卒業するものがあらわれはじめ，18か月を過ぎると

それが殆んどを占めるようになっていた。

2. 新生児期の母子分離（表３）

正常群と比べ不良群では，新生児期に母子別室制をとられていたものが多いようである。未消失群で保育器に入れられていたものが多いようであるが，統計的に有意であるとは確められなかった。

3. 乳児期の栄養（表４）

６か月以降も母乳を飲んでいたとするものが，正常群で４４.９％と多かったのに，不良群では２０.０％とその半分以下の割合であった。人工乳だけというものの割合は，正常群と不良群とで大きな差異は見られなかった。未消失群は例数が少ないため，傾向として述べることはできないが，やはり母乳授乳の期間が６か月以上のものは少ないようである。

4. 子どもの主たる養育者（表５）

正常群では全員が，母親が主たる養育者であると述べたが，不良群では母親以外のもので子どもの養育に関わる度合の強いものが，数は少ないがあらわれていた。未消失群では，保育所に子どもを預けたものが６０.０％と多かった。

5. 父親の子どもとの接触の度合（表６）

３群間で特別差異はみられなかった。全体として父親の子どもとの接触が少ないとするものは１０％内外で少なく，多いとするものが４０％以上もあり多かった。

6. 家庭への人の出入りの度合（表７）

未消失群で人の出入りが多いとするものが８０.０％と多いのに，正常群では２５.５％，不良群で３５.７％と少なかった。正常群と不良群を比べても大きな差異はみられなかった。

考　　察

人見知りや後追いをどのようなものと定義するかによって，それらの発現時期は異ってくる。見知らぬ他者への否定的感情，反応がみられる場合を，人見知りあるいは後追いのあらわれた状態とすると，生後６か月以降ということになるだろう。調査結果からも７か月頃より人見知りや後追いをあらわすものが増えていた。１２か月頃よりそれらの消失しはじめるものが多くなり，１８か月以降では殆んどのものが消失し，人見知りや後追いが発達過程の中で，６～１２か月間のうちに一過性にあらわれ消失していくもののようである。

人見知りや後追いの出現と，出産後母子同室制であったか，６か月以降も母乳を与えたか，母親が主たる養育者として接してきたか，といった事柄とは関連しているように思われた。しかし父親の接触の度合や人の出入りといった母親以外の他者のあり方との関連は，この調査の限りでは認められなかった。個々の症例にあたって検討してみると，母親の子どもとの接触のあり方が，父親や祖母といった周囲の人々との関係と関連しあっていることは，気づかされる。そうしたことから今後family dynamics のあり方からの検討が必要と考えられた。

妊娠の心理的過程に関する研究

研　究　目　的

妊娠は女性（特に初産婦）にとって人生における危機だといえる。したがってこの危機をのりこえることが人生の発達課題であり，女性から母性へと移行するための重要な鍵であると考えられる。

Leifer は妊娠期間中に発展させた反応が将来の母親行動の指標になるといっている。Uddenberg と Nilssen も妊娠期の情緒的問題，妊娠の意識的，無意識的否定，妊娠についての感覚の欠如などをもつ妊婦は出産後の適応が悪く，母親としての適応も悪いという。

もしそうであれば妊娠期間中の妊婦のもつ問題点を明らかにし出産後の適応にそなえる必要がある。

本研究では，妊娠期を三期に分け周生期までの妊婦・母親のもつ特徴・問題を①パーソナリティ，②対人関係，③環境の側面から明らかにしたい。

研　究　方　法

対象　大牟田市の東原産婦人科病院に通院する妊婦５５名で，特に初産婦に限定した。

方　法

①質問紙㋑家族構成，妊婦の幼児期における母親からの接触体験についてきいたもの，㋺子ども好きかどうか，妊娠，胎児，出産に対する知覚，態度，感情のあり方，夫の期待のあり方などをきいたもの。

②夫婦関係役割テスト

③モズレイ性格検査

④身体像に関する調査

㋑自己像画

㋺ロールシャッハテスト

㋩　Body buffer－zone　test

を個別に実施した。

結　果

①－㋑：母親と一緒にねたとかおんぶをしてもらったなどの記憶がないものが４６.４％いた。

①－㋺：妊娠に対して肯定的でないもの１２.５％，夫が期待していないもの１２.５％であった。

胎動は受精後４～６ヶ月に殆どの者が感じはじめる。しかし６ヶ月を過ぎて感じないものがいた。

②：理想と現実の夫婦の一致度の平均は９３.２％でありRange は５２.６％～１００％であった。出産が近づくにつれてこの一致度はあがる傾向にある。

③：妊婦の方が非妊娠女性よりやや非神経質であった。この傾向は妊娠が近づくにつれ増大する。

④－㋑：自分の身体の変化にイメージがついていけない妊婦は妊娠二期に最も多かったが大多数のものは三期になるにつれ自分のイメージを客観像に近づけるようである。

④－㋺：Barrier score は出産が近づくにつれ減少する。

④－㋩：夫婦のBody buffer zornは出産が近づくにつれ距離において減少，向きにおいて向かい合せの傾向が増大する。

諸要因の力動的関係性，不適応の妊婦の問題など詳細な結果は次年度に報告したい。

表1

人見知り・後追い発達評価表

子どもの姓名　　（男・女）生年月日 昭和　　年　　月　　日（　　か月）

検査年月日 昭和　　年　　月　　日

人見知り

	気づかない	たまに	時々	よくある
1．お母さんがあやすと笑うのに、知らない人では笑わない。	(　)	(　)	(　)	(　)
2．泣いている時、お母さんが抱きあげると泣きやむが、知らない人では泣きやまない。	(　)	(　)	(　)	(　)
3．お母さんに抱かれている時、知らない人が寄ってくると変な顔をしたり、じっと顔をみつめたりする。	(　)	(　)	(　)	(　)
4．お母さんに抱かれていても、知らない人がおいでおいですると、お母さんの方へふりむく。	(　)	(　)	(　)	(　)
5．知らない人に抱かれると泣きだす。	(　)	(　)	(　)	(　)
6．知らない人があやしたり、おいでおいでしたりすると、お母さんにしがみついたり泣いたりする。	(　)	(　)	(　)	(　)
7．知らない人があやしたり、おいでおいでしたりすると、お母さんにしがみついたり泣いたりするが、以前よりも慣れるのが早くなった。	(　)	(　)	(　)	(　)
8．知らない人があやしたり、おいでおいでしても泣かなくなり、時には笑うようになった。	(　)	(　)	(　)	(　)

後追い

	気づかない	たまに	時々	よくある
1．そばにだれもいなくなって、一人だけになっても泣きださない。	(　)	(　)	(　)	(　)
2．お母さんがそばから離れても、だれかそばについていれば泣きださない。	(　)	(　)	(　)	(　)
3．だれかそばについていても、お母さんの姿が見えなくなると、泣きだしたり後を追ってくる。	(　)	(　)	(　)	(　)
4．お母さんが一寸した用事で外に出ようとすると、泣いて後を追ってくる。	(　)	(　)	(　)	(　)
5．お母さんの姿が時々見えていれば、お母さんから離れて遊べるようになった。	(　)	(　)	(　)	(　)
6．お母さんの姿が見えなくなっても、近くにいることがわかっていれば、お母さんから離れて遊べるようになった。	(　)	(　)	(　)	(　)

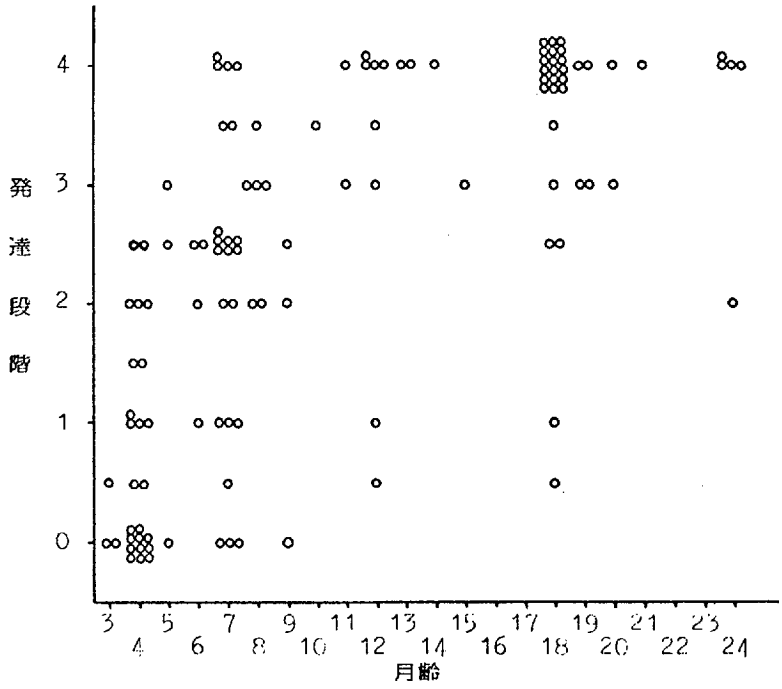

図 1　人見知りの出現状態

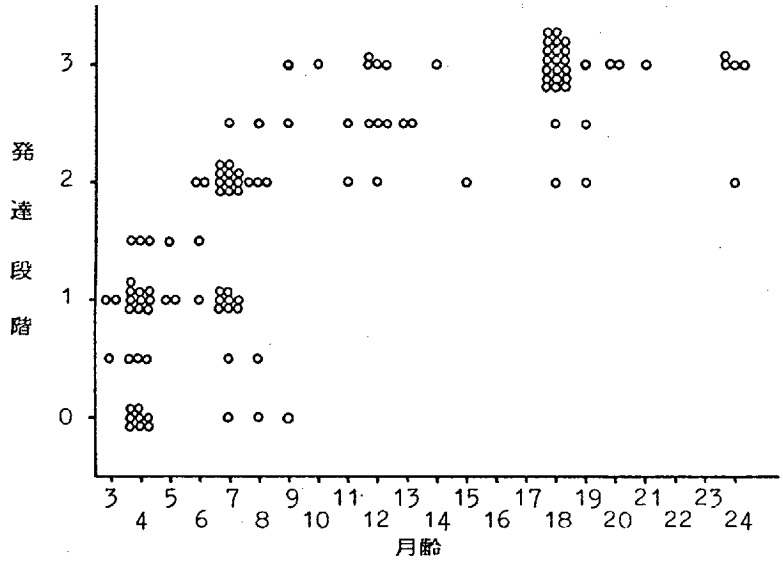

図 2　後追いの出現状態

表2

人見知りの発達段階

0　母親と未知の人物との識別がついていない段階

1　母親との識別はついているが、未知の人物に対し特別な感情を示さない段階

2　未知の人物に対し警戒を示す段階

3　未知の人物に対し泣いたり激しい不安を示す段階

4　未知の人物に少しなれてきた段階

後追いの発達段階

0　そばにだれもいなくても不安を示さない段階

1　だれもいなくなると泣きだすが、母親でないといけないということのない段階

2　母親がそばにいないと泣きだす段階

3　母親から少し離れていられるようになった段階

表3　新生児期の母子分離（母子同室制か？）

	正常群 N(%)	不良群 N(%)	未消失群 N(%)
母子同室	33(67.3)	7(46.7)	3(60.0)
母子別室	16(32.7)	8(53.3)	2(40.0)
保育器※	6(12.2)	2(13.3)	2(40.0)
計	49(100)	15(100)	5(100)

※ 保育器の項は母子別室にふくまれる

表4　乳児期の栄養

		正常群 N(%)	不良群 N(%)	未消失群 N(%)
人工乳だけ		8(16.3)	3(20.0)	0(0))
母乳	1か月未満	4(8.1)	1(6.7)	1(20.0)
	1か月以上	15(30.6)	8(53.3)	3(60.0)
	6か月以上	22(44.9)	3(20.0)	1(20.0)
計		49(100)	15(100)	5(100)

表5　子どもの主たる養育者

	正常群 N(%)	不良群 N(%)	未消失群 N(%)
母親	49(100)	12(80.0)	2(40.0)
母親と母親以外の者が半々	0(0)	2(13.3)	0(0)
母親以外の者	0(0)	1(6.7)	3(60.0)
保育所※	0(0)	1(6.7)	3(60.0)
計	49(100)	15(100)	5(100)

※ 保育所の項は母親以外の者にふくまれる

表6　父親の子どもとの接触

	正常群 N(%)	不良群 N(%)	未消失群 N(%)
多い	24(49.0)	6(40.0)	3(60.0)
普通	21(42.9)	7(46.7)	2(40.0)
少い	4(8.1)	2(13.3)	0(0)
計	49(100)	15(100)	5(100)

表7　家庭への人の出入り

	正常群 N(%)	不良群 N(%)	未消失群 N(%)
多い	12(25.5)	5(35.7)	4(80.0)
普通	22(46.8)	4(28.6)	0(0)
少い	13(27.7)	5(35.7)	1(20.0)
計	47(100)	14(100)	5(100)

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

はじめに

われわれの研究テーマは三領域にわかれる。つまり①妊娠期の母性性獲得からアタッチメント期前までの母子相互作用,②アタッチメント形成期前後の母子相互作用,③障害をもつ子どもの母子相互作用の研究である。それぞれの領域の主たる担当者は②を板井,①を小串,③を橋爪が受けもつが,しかしすべての研究者が共同で研究をおこなっている。

本年度は一年度であるので詳しいまとめが行なわれていない領域,調査がはじまったばかりの領域もあるので,ここでは一部分の報告を行なうにとどめる。